

企画展開催にあたって

やまい
病とたたかう人びと

～天然痘から新型コロナウイルスまで～

2020 年初頭にはじまった新型コロナウイルスによる世界規模のパンデミックは、未だ終息の兆しが見えません。変異しながら感染拡大を繰り返し、私たちの生活に大きな影響を与えています。

これまでの歴史を振り返ってみますと、新型コロナウイルスに限らず、先人たちはさまざまな感染症と闘いながら生活してきました。約 100 年前のスペイン風邪でも、新型コロナウイルス同様に世界的な大流行となり、1 億人に上るとも言われる犠牲者を出しています。日本では 3 年半にわたり 3 回の流行を経て終息しました。こうした未知の病との闘いは、古代から現代まで長い歴史の中で幾度となく繰り返され、そして克服してきたのです。

本展示では、過去の感染症と闘ってきた人びとに焦点を当て、天然痘から新型コロナウイルス感染症までを取り上げます。大仙地域に残された記録から学び、現代、そして未来の問題に立ち向かうための一助となれば幸いです。

令和 4 年 10 月

大仙市アーカイブズ館長

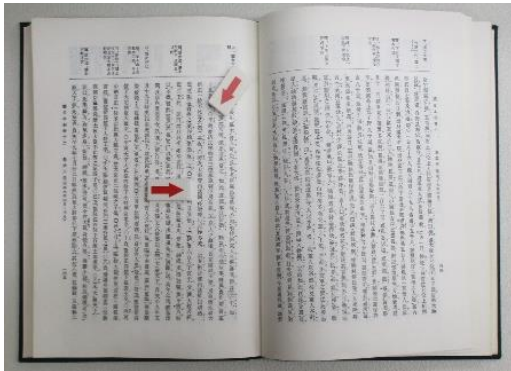
◆◆ 展示資料紹介 ◆◆

感染症と日本

日本に残された記録の中で、全国規模の感染拡大の疫病のはじまりは奈良時代ではないかと考えられます。疫瘡（＝天然痘もしくは麻疹）の流行は、遣唐使や遣新羅使など東アジアにおける外交に伴う感染ウィルスの侵入が要因です。

以後、日本における新たな感染症の流入は、中国、朝鮮半島、琉球などの外部からもたらされました。こうして、日本と感染症の闘いがはじまったのです。

部からもたらされました。こうして、日本と感染症の闘いがはじまったのです。

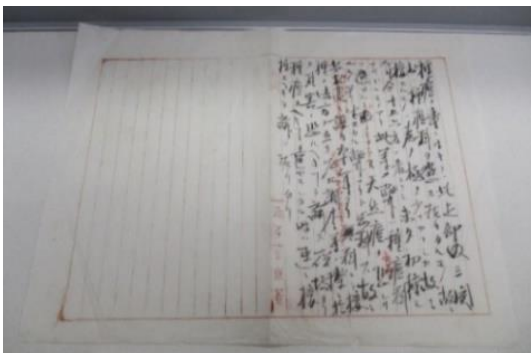
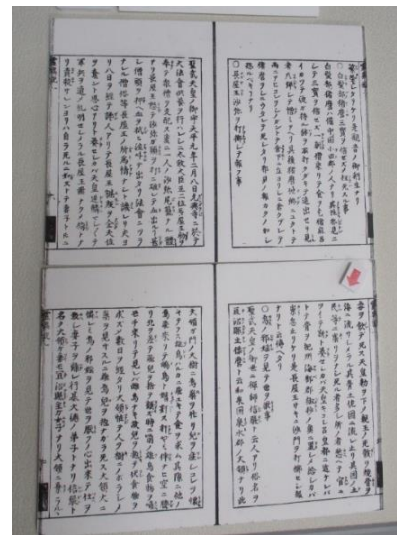


◀ 続日本紀

天平9(737)年に日本で2度目の疫瘡(天然痘)の大流行があり、藤原不比等の四子、武智麻呂、房前、宇合、麻呂が相次いで亡くなった。大宰府管内からの拡大であったことが読み取れ、遣新羅使の帰国が原因と思われる。

日本霊異記 ▶

天平元(729)年に藤原四子の謀略で亡くなった長屋王の死にまつわる仏教説話。聖武天皇が忌避して長屋王の骨を土佐国へ流したところ、長屋王の祟りのため土佐国で多くの人が亡くなった。このため、奈良の都近くに骨を埋めたところ祟りが止んだ。天平年間に天然痘が流行し、その原因が長屋王の祟りであったことを示唆している物語。明治時代の刊本。

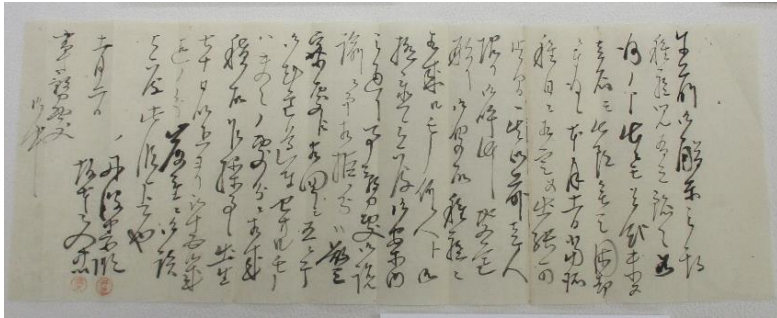
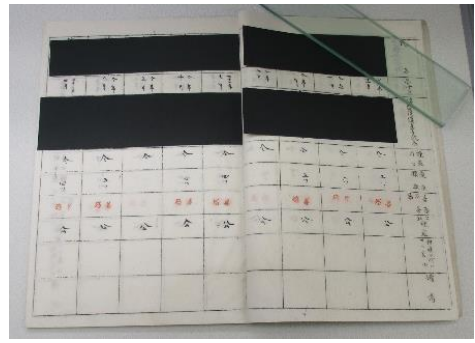


◀ 書付(明治)

種痘が有料であり、15～6歳になっても接種しない者がいるため、役場においてこの年から無料接種をはじめたことがわかる。(山口家文書)

明治43年第1期種痘簿（明治43年）▶

氏名、生年月日、発痘顆数、善感かどうか、公私種痘の別などが書かれている。（大沢郷村役場文書）



◀ 書状（明治）

種痘掛から事務処宛に書かれた刈和野村・峰吉川村の種痘に関する書状。出生後70日から25歳までの明治8年接種済証明書所持の者の再接種（8年後）のこと、未接種の者の接種について書かれている。（山口家文書）

天然痘と神頼み

天然痘にかかると高熱・腰痛・頭痛に苦しみ、死に至ることが多く、回復しても主に顔面に痕（あばた）が残る病気であった。種痘が普及するまでは手の施しようが無く、特に恐れられた病気で、人々はこの病気にかからぬよう神仏に祈るほかなかった。

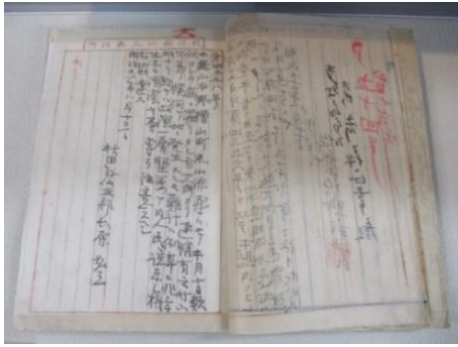


疱瘡（天然痘）の御守の包み紙
（太田町史編さん資料）



天然痘に御利益があるとされた山形県東根の若木神社は広く信仰を集め、各地に「若木（おさなぎ）山」の石碑が残る。

（太田町史編さん資料）

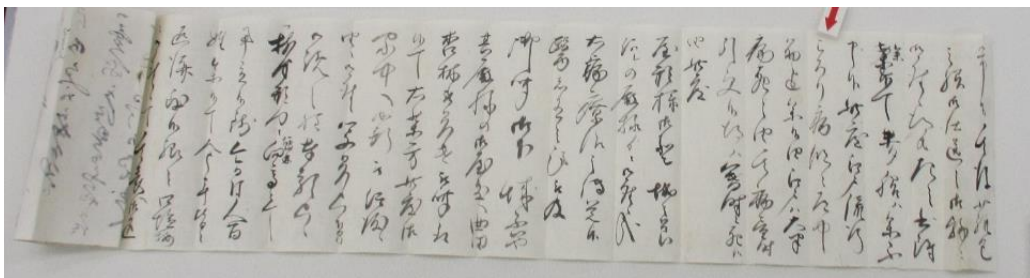


▲ 庶務既決編冊（明治 21 年）

秋田県内でコレラが発生したことが各郡に通牒されたが、のちに腸カタルの誤診であったことが記されている。コレラ発生の際には清潔に注意することが書かれている。（大沢郷村役場文書）

事務簿 全（明治 30 年）▶

コレラと赤痢の予防従事者の取り調べ。村吏 4 名、人夫 10 名が従事し、従事者に感染死亡者は出していない。（大沢郷村役場文書）



▲ 書状断簡（江戸後期）

江戸で流行したコレラ（ころり）について、道中筋（秋田藩の江戸参勤道中のことカ）まで感染拡大していること、昼にかかると夜には死んでしまうことなどが伝えられている。（山口家文書借用）

コレラのこぼれ話

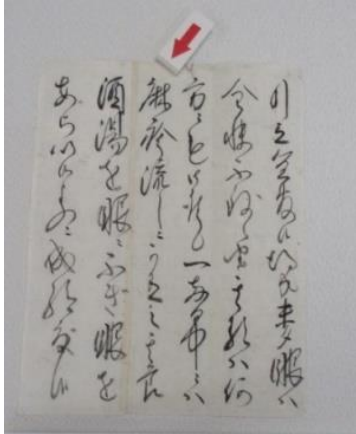
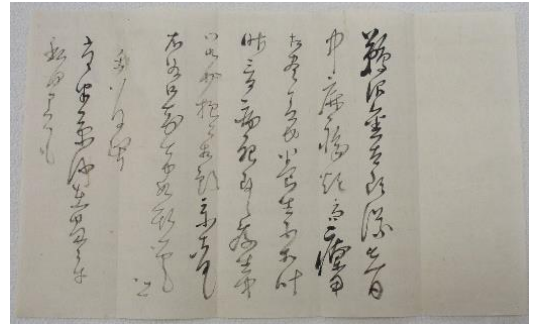
大曲では明治 28（1895）年にコレラが大流行した。その時のこぼれ話。

米町（栄町）に廻し舞台のある「大陸座」という芝居小屋があった。大曲にコレラが流行してその芝居小屋が隔離病舎となって 30 名のコレラ患者が一時そこに収容された。水を飲むことを厳禁されていたが「最源のバツパ」と「佐藤さだバツパ」という二人は日頃の友達だったので、死んでもよいからと二人しめし合わせて隠れて水を飲んでしまった。ところが皮肉なことに飲んだ二人は助かったがあとの人達は全員死んでしまった。日頃からおどけバツパで有名だった二人は「医者 of 言うことばかり聞くもんでねえ、あの時水を飲まなかったらオダブツだった。あんなうまい水を飲んだこと初めてだ」と冗談言っではなしていたという。

出典：三森英逸『大曲のまちなみと住民の歴史』116-117 頁

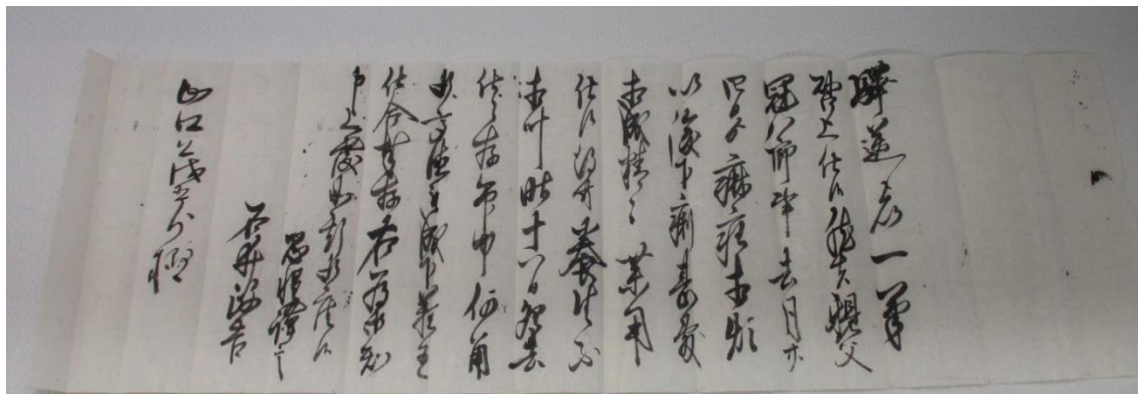
書状（壬8月4日）▶

江戸時代、麻疹は亡くなる確率が高く、この書状でも麻疹にかかった鶴沼金太郎が8月3日に亡くなっている。（山口家文書借用）



◀ 書状断簡（江戸後期）

麻疹（はしか）に罹ったため、麻疹流しと目洗いのことについて書かれている。麻疹流しの風習があったこと、麻疹で目が見えなくなる場合があり、その対策として酒湯で目を洗っていたことがわかる。（山口家文書）



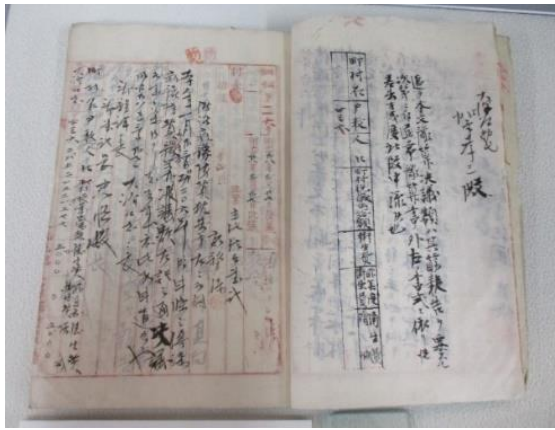
▲ 書状（明治）

父冠八郎が麻疹にかかり、薬用など養生したが死去した事を山口家へ報告しているもの。現在と違い、多くは大人が麻疹にかかって命を落としている。（山口家文書）

はしかなが

麻疹流し

江戸時代、麻疹は死亡率が非常に高く、「命定め」と恐れられていた。人々は、当時人気のあった錦絵を通して疫病を認識し、対処しようとした。文久2（1862）年の文久麻疹大流行の際に制作された「はしか絵」には、麻疹を起こすものとして「はしか童子」など、それを制圧・退治するものとして鍾馗様しょうきなどが描かれている。麻疹除けのまじないとして、タラヨウの葉に呪文と病人の名前を書いて川に流す「麻疹流し」についても紹介された。

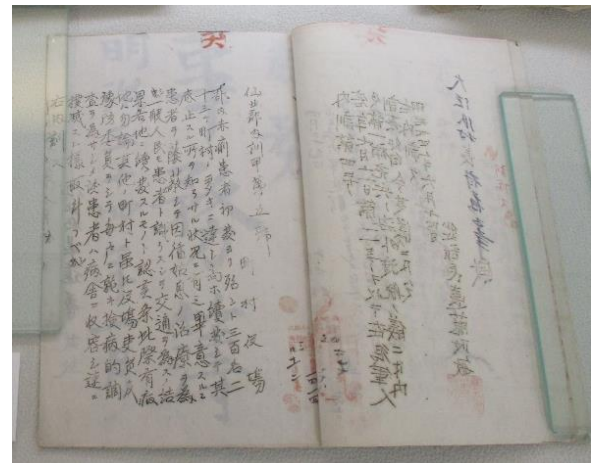


◀ **学務農商事務簿（明治 28 年）**

明治 28 年の生徒に対する伝染病予防費は 5 円で、衛生費として計上されていることがわかる。前年の衛生費は 0 円。（大沢郷村役場文書）

▶ **仙北郡役所内訓（明治 43 年）**

赤痢発生から 300 名を超す罹患者に達し、郡内 13 ヶ町村に及んでおり、病舎に収容して撲滅するように郡役所から内訓が出されている。（大沢郷村役場文書）

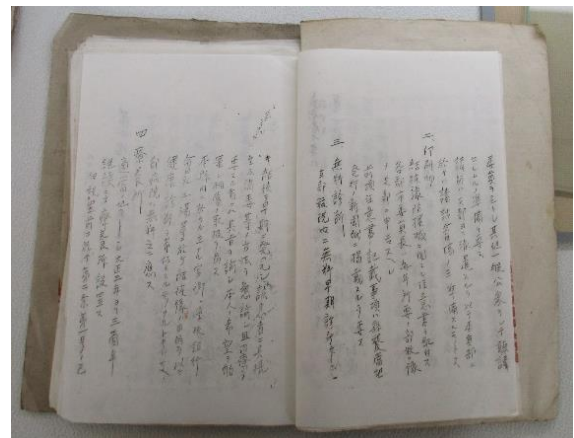


◀ **学校衛生事務簿（大正 2 年）**

トラホーム罹病者の家族に対して、大沢郷小学校において検眼が行われた。学校衛生費として、この時代の町村ではトラホーム予防費が計上されていた。（大沢郷村役場文書）

▶ **赤十字武徳会尚武会育英会愛国婦人会等事務簿（大正 5 年）**

日本赤十字社秋田支部において定められた結核予防撲滅規程。この中で施設する事項として講習会、印刷物、無料診断、診療所が示されている。（大沢郷村役場文書）

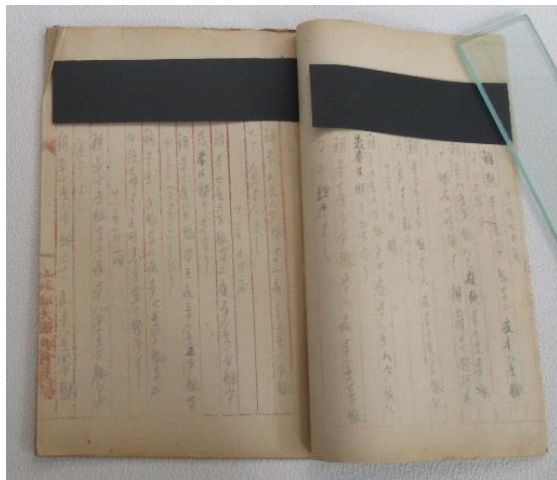




◀ 秘密書類 町長（明治45年）

大曲小学校校長が肺結核症のため、校舎の消毒をすることが書かれている。その際には仙北郡役所の吏員が立ち会ったことがわかる。

（大曲市役所文書）

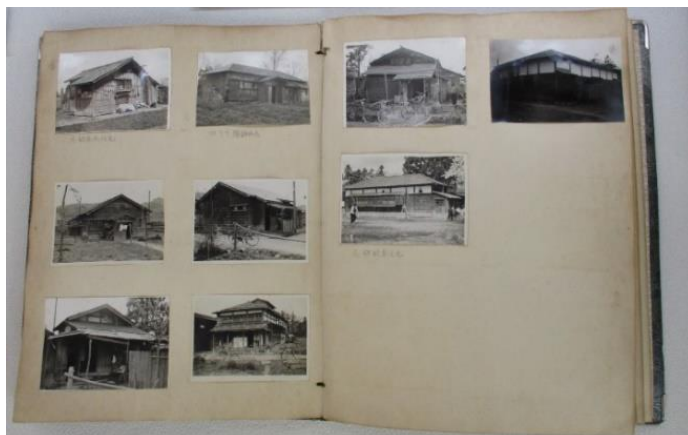
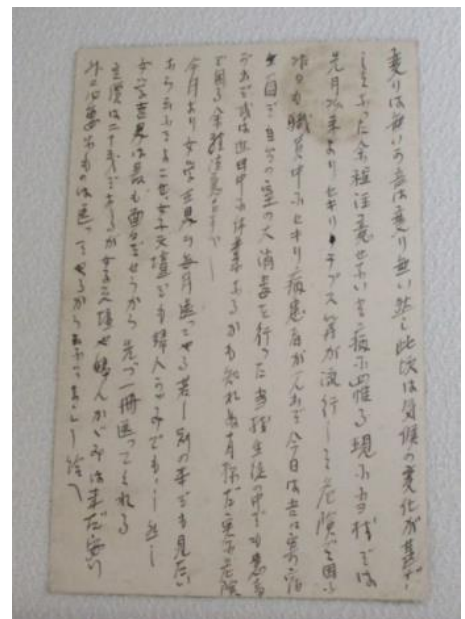


◀ 看護日記

大沢郷村の隔離病舎での看護日記。大沢郷村では腸チフスの患者が隔離病舎において治療を受けていた。（大沢郷村役場文書）

ハガキ（明治42年10月12日）▶

学校において赤痢や腸チフスが流行していることが書かれている。患者が出ると寄宿舍を消毒していたことがわかる。（平瀬家資料）



◀ SCRAP BOOK（昭和）

昭和の大合併後の大曲市内の施設写真。この中に、旧四ツ屋村の隔離病舎写真が残されている。（大曲市役所文書）